

## ひとりを看る目、 その目を世界へ

本学広報誌「一碧」20号「ひとりを看る目、その目を世界へ」ページへ「先輩が思うひとりを看る目、その目を世界へ」「後輩と共有したい仕事や生活の“楽しい”」をテーマに、卒業生からメッセージをお寄せいただきました。

誌面の都合上、本誌に全文を掲載することができませんでしたが、こちらにて、全文を公開させていただきます。

卒業生のみなさま、大変お忙しい中、後輩へのあたたかいメッセージを、誠にありがとうございました！心より感謝を申し上げます。

後輩のみなさん、先輩方のメッセージをしっかり受けとめ、学生生活を送ってください！

看護師として働きもう15年余りが過ぎました。この間に患者さんから学んだことは数知れません。1人の患者さんと向き合うことで見えてくる、その人の病態や全身状態と同時に、人生や思いが、その人らしく生きたいと訴えてきます。「看護観」というものを、これから先聞かれることがあります。患者に寄り添い、患者の希望に沿った関わりをすること、ようやく自分の中の「看護観」が明確に認識できた今日この頃。世界まで看ることはまだ難しいですが、管理者として役割を担う中で、病棟・病院と、そんな思いで患者さんを看る目が今の私には広がっています。



患者さんと向き合うときの自分の思いに気付く目、患者さんの希望と一緒に見る目、その目が見据える先に患者さんの幸せが広がるのではないのでしょうか。そんな仲間が増え、一緒に働くことができることを楽しみにしています。

近隣医療施設対抗バスケットボール大会にて、  
下段右から2番目が私です

福岡赤十字病院  
池田 尚大 さん (2004年度卒)

毎日、糖尿病の患者さんと関わります。「また（何度も）昼のインスリンをスキップして悪くなった」「また通院を中断して悪くなった」「また糖尿が悪くなったから入院するね、よろしく」こんなことが日常的です。そんな方のことを内心「このままにしたら悪くなるとわかっているのに、なんでちゃんとしなないだろう」「あーまた言い訳」「自分勝手にインスリンをやめ、通院を勝手に中断し、悪くなったら頼ってくる、身勝手な人達」と思っていました。

しかし彼らの事情をよく聞いてみると、「正社員じゃないから、インスリンしているとばれたらクビになる」「補食すると、サボっていると思われるからできない。だから職場で低血糖になるわけにいかないからインスリンを飛ばしている」「受診の予約日に急な仕事が入った。断ると仕事が回ってこなくなる」

このように、インスリン中断や受診ができない環境は、本人の意志ではどうにもならない事情もあることを知ったのです。

それから患者さん一人一人には背景があるということを理解し、「そんな大変な中来てくれましたね」など労う声をかけていくようになりました。

そうすると彼らも、少しずつ心を開いて話をしてくださるようになりました。「これ以上悪くならないようにちゃんと来ないとな」「月末だったら来れそうだから調整してくれる？」「職場に病気のことを話して、協力してもらえなくなった」と前向きになる方が増えていきました。

背景を理解せず私だけの解釈で決めつけてしまっていたことが、本当は健康でありたい思いや良くしたい思いを潰していたのかもしれない。





私の場合、大学で学んだことはすぐに芽は出ませんでした。しかし「なんでだろう」「なぜだろう」ととことん考えること、見えない背景に想像を巡らせること、という大切な種を植えてもらっていたからこそ、大きな樹になる可能性をひめているのではと感じています。

在校生の皆さんも大変なこともあると思いますが、大学でもらった種を大切に育てて行ってください。

原田 聡子 さん (2004 年度卒)



在校生のみなさんこんにちは。私は 13 期卒業生の 大北帆乃香 といひます。私は今、新型コロナ感染治療後の患者様の受け入れを行っている病棟で看護師として働いています。

病院では、現在も感染対策のため面会は全面禁止となっています。そのため、リモートで久々に患者様を見られたご家族の中にはコロナ治療後の患者様の体力・活気の落ちた状態を見て「入院前は歩いていた、こんなはずじゃない、病院の対応が悪いのではないか」と怒りをぶつけられる方もいらっしゃいます。

なにもかもが限られ、不自由な社会現状。”人を見る目”・・・わたしが今みているものはなんだろう。なにがみえていないのだろう。改めて看護師としての存在意義を問い直す中ですが、常に人より多く感じとり、多く疑問をもち、考えることへの努力は欠かさず行なっています。これは、大学時代にサークルや委員会活動を通し、この努力の重要性を実体験として感じられたからです。

何をし、何をしないか、何を考え、何を考えないかも自分で選べる。同じ与えられた学生という時間だからこそ、限られた中でも自分で道や方法を模索し、充実した学生生活を送ってほしいと思います。

この社会現状はしばらく続き、まだまだ大変なことは多いと思いますが、お互いに頑張っていきましょう！



大北 帆乃香 さん (2016 年度卒)



私は、福岡赤十字病院で勤務している9年目の看護師です。ICUに所属しており、仕事も楽しく勤務していますが、自己学習以外の私生活では、できるだけ仕事から離れたことをするように心がけています。新型コロナウイルスの影響もあり、外出自粛で娯楽と接することは難しかったと思います。そんな私が出会った「楽しい」は、「庭づくり」でした。自宅を購入したのですが、何もしていなかった庭を手入れすることにしました。始めに、庭に降りるためのウッドデッキを作成しました。次に、天然芝を貼り育てました。元々DIYの知識はなく、インターネットやYouTubeなどを参考にし、初めての挑戦でしたが、満足のいく仕上がりになりました。夏には、子供達の色水遊びによってウッドデッキは汚されてしまいましたが、秋には中秋の名月を見るなど、家族と過ごす良い空間を作ることができました。これからもたくさんの思い出をこの庭で作っていったらいいなと思っています。

新しい春を迎えるにあたって、芝の更新作業、頑張ります!!

福岡赤十字病院 看護師 水谷 優一 さん (2011年度卒)



私は福岡県福津市出身で、大学時代はエイサーサークルに所属していました。大学で熊本県出身の妻との出会いもあり、就職は熊本へ。今年4月で熊本赤十字病院入社7年目を迎えました。

入社後から内科病棟に勤務しており、これまでチューターシップによる後輩指導、リーダーシップ研修も経て、今では統括リーダーを担って病棟全体をまとめられるように努めています。

自分が学んできたことや多職種からの意見を参考に看護実践へと活かし、患者さん・家族の良い反応として現れること、また後輩指導を行うことも仕事のやりがいとなっています。

妻とは3年前に結婚し、2019年には長男を授かりました。妻も同病院の外科病棟を経て、現在は外来勤務をしており、日々奮闘しています。共働きの忙しいですが、お互い仕事のやりがいを持ちつつ、育児も楽しみながら頑張っています。



COVID-19が流行り始めて、早1年以上が経ちました。ワクチン接種も開始しましたが、未だゴールの見えない戦いが続いています。学生の皆さんも大学講義・実習や私生活でも思うように過ごすことができず大変かと思いますが、体調に気を付けて元気に楽しく過ごしてほしいです。応援しています。

江上 優人 さん (2014年度卒)

江上 茉莉(旧姓 前田) さん (2015年度卒)

私は消化器や呼吸器等の外科病棟で勤務しており、主に手術や化学療法を受けられる患者さんと関わっています。今年で看護師3年目となり、責任の重さを感じることが多く日々勉強になることも多いです。

仕事は毎日忙しく大変なことも多いですが、患者さんが回復されて笑顔でご退院されるのを見ると、とてもやりがいを感じます。また、病棟の雰囲気もとても良く、先輩方も温かくご指導をしてくれるため、毎日充実しながら楽しく働くことができています。

国試の勉強や自習で大変な日々とは思いますが、私もまだまだこれからだと思っています。ぜひ一緒に頑張りましょう。

青沼 彩希 さん (2017年度卒)



1番左が青沼さん。同期と共に。



写真が石光さん。同期と共に。

看護師として働いて早2年が過ぎようとしています。2年間はあっという間で、とても充実していました。1年目は社会に出て働くことに最初はとても緊張しており、勉強することも多く、時には逃げ出したいと思うことがありました。しかし、優しい先輩方のご指導や同期と支え合うことで乗り越えることができました。2年目になると後輩ができ、責任感が強まったと思います。不安もありましたが、1番の支えは同期でした。今では行けませんが、よく同期とご飯に行きました。たくさんのお話をいつもしています。ここまで頑張ることが出来ているのは同期の存在が大きく、楽しく働いています。コロナ禍ではありますが、みんなで頑張りましょう。

福岡赤十字病院 石光 明日香 さん (2018年度卒)

初めまして。今津赤十字病院で勤務をしている長島と申します。在校生の皆さんは現在コロナ禍の中でどのように過ごされていますか？現在病院毎にコロナウイルス感染に備え、あらゆる対策を行っています。私の病棟内でも、患者様と十分にコミュニケーションが図れるような方法を考え、病棟内でのチーム連携をしながら、感染防止対策を行っています。それに加え、1年目として先輩の行動一つ一つの意味を理解し吸収しているのですが、気づけば1年もあっという間に過ぎてしまい、これから先輩になると思うと不安でいっぱいです。

しかし、そんな中でも患者様と関わる際に「ありがとう」や「忙しいのに、頑張ってるね」などと労いの言葉をかけてもらうことがあります。これは私にとって一番の生きがいになっています。また、技術においても、経験の積み重ねによって任せられることもあり、自信につながっている部分もあります。これが私にとって仕事をしていく中での“楽しさ”となっています。

大学生活で大切にしてほしいことは、“人とコミュニケーションを図ること”です。現在コロナ禍でなかなか難しい状況かもしれませんが、リモートなどのツールを使用して、積極的に関わりを持っていくことが重要だと考えます。

そしてコミュニケーション能力は勉強などと違い、大学生活を送っていく中で自然と身につけていくと思っています。そのためには先生や先輩、そして同級生と勉強の話だけでなく色々な話を行っていく必要があります。

この4年間で多くのことを学べるよう応援しています。



長島 辰弥 さん (2019年度卒)